『源氏物語』のニヤについて

近藤要司

（一）はじめに

中古においては、真偽疑問文には、「助詞カの文末用法」、「助詞ヤの文末用法」、「助詞ヤの文中用法（係結）」の三つの形式があった。このうち、「助詞カの文末用法」について、筆者は近藤（一九九八）において、『源氏物語』の助詞カの文末用法の観察を行った。この中で、文末カが活用語の連体形に下接したものは、真偽疑問文の中の特定のタイプ「対象事態へ適用する説明解釈の適否」（以下、本稿では「解釈適用型疑問文」とする）に関する疑問文に偏るということを明らかにした。

解釈適用型疑問文は、現代語ではよく「〜のか」の形で用いられる。（注一）例えば、朝起きてなんだか喉が痛いときに「空気が乾燥しているのかな」あるいは「空気が乾燥しているせいかな」と言う。この場合には、「空気が乾燥している」という事態が成立しているか否かよりも、話者が直面した事態「のどが痛い」への一つの解釈として、「空気が乾燥している」ということが適用できるか、ということを問題としているのである。

一方、真偽疑問文にはもっと単純に事態の成立のみを問題とするものもある。たとえば、外出してから「あ、ベランダの花に水やったかな」などという場合の疑問文である。このようなタイプの疑問文を以下「事態成立型疑問

文」と呼ぶことにする。

この両者については、右のような典型的な例をだせば違いは明確であるものの、真偽疑問文全体をこの二つにきれいに分けることはしにくいと思われる。それは、単純な事態成立型疑問文でも、その発端となる疑念の発生は、話者をめぐる状況と関連しているのが普通だからである。また一方、「空気が乾燥しているのかな」のような解釈適用に重点が置かれた疑問文でも多くの場合は、事態成立と完全に無縁ではありえない。

とはいえ、「空気が乾燥しているのかな」と「ベランダの花に水をやったかな」のごとく、解釈適用と事態成立の二つの面のどちらかに重点を置いて述べる場合が多々あるのは事実であるし、この二つの意味のどちらかに用いられやすい疑問文の形式があるのも事実である。現代語ならば「〜のか、〜せいか」などがそうであり、平安時代中期ならば、それは、たとえば、連体形＋文末カだったのである。

その文末カが連体形に下接した文が解釈適用型に傾くのは、近藤（一九九八）では以下のような理由だと考えた。

連体形は句的体言でもある。その意味で連体形下接の文末カは「体言＋文末カ」と連続する。「体言＋文末カ」による疑問文は、「イルカは哺乳類か」のような、主語体言が述語体言の範疇に属するかを問うタイプが一般的であるが、これは、ある場合には「露の光は玉か」のような見立て的な関係を問題とする疑問文としても用いられる。この見立て型疑問文は、主語のモノをあえて通常の次元とは別の次元から捉え直そうという疑問文である。これは、主語モノに対してある解釈を与えようとする営みにほかならない。

「連体形＋カ」については、この別次元からの捉え直しが事態と事態の間で行われるのである。つまり、「当面する事態は別角度から見ればこうも解釈できるかもしれない」ということを問題とする疑問になるわけで、これはつまり解釈適用型の疑問文のことである。このような事情で「連体形＋文末カ」の疑問文は、解釈適用型疑問文として適しているのである。いや、適していたというよりも、中古の段階では、連体形下接の文末カによる疑問文は

もっぱら、この解釈適用型の疑問文として用いられたと考えられるのである。

後代には、真偽疑問文のみならず、疑問文を一手に引き受ける文末助詞カも中古にはまだまだこのような用法の制限があり、『源氏物語』の中の用例数も、文末カ全体で一四七例であり、ヤと比較すればほんの少数にすぎない。

一方、助詞ヤの疑問文においては、このような解釈適用型の疑問文ではない、単に事態の成立の如何を問題とする事態成立型疑問文がいくつも見られるのである。

・「北殿こそ、聞き給ふヤ」（夕顔　一の一三九）

・「その、かたかどもなき人ハ、あらんヤ」（帚木　一の五九）

・「又、この事を知りて、もらし傳ふるたぐひヤあらん」と、の給はす。（薄雲　二の二三四）

・「この男に、さりげなくて、目つけよ、佐衛門の大夫の家にヤ入る」（浮舟　五の二五三）

などなど、事態成立の如何そのことを問題とする例がいくつも挙げられる。

では、「連体形＋文末カ」は解釈適用型で、助詞ヤによるものはすべてが事態成立型疑問文かというと実態はそうではないのである。助詞ヤにおいても、解釈適用型になりやすい文型と思われるものが存在する。それが「連体形＋断定連用形に＋や＋（あらむ）」のタイプである。このタイプでは、一部の「～ばにや」などを除いて、文末カと同様に、体言あるいは、連体形に下接している。したがって、文末カと同様の事情でニヤのほとんどの用例は、解釈適用型になるはずである。

磯部（一九九二）によれば、一般にカによる真偽疑問文が疑い、ヤによるものが問であるのに対して、このニヤのみは疑いに偏って用いられるということだが、これは解釈適用型疑問文が疑いに用いられやすいということも要因の一つになっていると考えられる。すなわち、解釈適用型疑問文が発せられる際には、前段階として、話者がある事態に直面し、その事態に対しての強い関心を持っていることが必要だが、そのような関心は他者とは共有しに

くいものである。したがって、そのような疑問を他者にむけて発することは、単純な事態成立の可否を他者に問うことよりは少ないのである。（注二）

以下、本稿では、断定連用形ニに係助詞ヤが下接した用例のうち、結びの述語が「あらむ」であるものと、結びが省略されたものを取り上げて、これが解釈適用型の疑問文であることを確認していくことにする。

用例は、国文学資料館で公開している岩波書店の『日本古典文学大系　一四～一八　源氏物語一～五』のデータベースを利用し、かつ、小学館『古典文学全集　（1）～（5）』と本文の比較を行った。各用例のカッコ内には源氏の巻名と大系本の巻数と頁数を示した。

（二）

（二）の一　ニヤの全体像

断定の助動詞ナリの連用形ニに係助詞ヤが下接したものは、『源氏物語』の中に四二六例存在する。以下そのうちわけを示す。

ニヤアラム（「侍ラム」などを含む。以下同じ）	一〇六例
ニヤアリケム	二九例
ニヤアルラム	五例
その他（アラマシ、アリケリ、アル）	八例
結びが省略されているもの	三〇二例
計	四五〇例

結びが省略されたものの中には、あるいは、上の「ニ」が本当に助動詞ナリの連用形か疑わしいものもある。し

かしながら、ここでは「あらむ」が省略されていると一応見ておくことにする。以下では、この中の大半を占める「〜にやあらむ」型と結び省略型を対象に、その表現が解釈適用型に傾くかどうかの確認を行う。

さて、ではその「にやあらむ」型あるいは、省略型の内部はさらにどのように分類されるのか、ここでは上接する部分によって分けてみる。

「にやあらむ」

- 名詞下接　三四例
- 連体形　五六例
- 〜ばにや　五例
- 〜とにや　三例
- 形容動詞語幹　四例
- その他　二例

「その他」としたのは、「さにやあらむ」の二例である。

省略型

「にやあらむ」とほぼ同様の類型に収まるが、用例ははるかに多い。

- 名詞（N）　一二五例
- 連体形　一三一例
- 〜ばにや　三二例

・形容動詞語幹　九例
・その他　五例

その他としたのは「さにや」などである。

以下、名詞下接と連体形下接について、「にやあらむ」型と省略型について見てみる。

（二）の二　名詞下接

名詞に下接するものをさらに、「イルカは哺乳類か」のような単純なモノ名詞文の疑問文タイプ、「～というコトハ～というコトか」のような事態主語事態述語タイプ、後続部分に対しての解釈を提示している挿入解釈タイプ、描写されている場面に対する解釈を行っている現状解釈タイプ、および、その他に、わけて用例をあげる。

（二）の二a　単純な名詞文タイプ

「にやあらむ」型　一一例

・「世中にあらぬ所は、これにヤあらん」とぞ、かつは、思ひなされける。（手習　五の三六〇）

・大將殿とは」「この、女二の宮の御をとこにヤ、おはしつらむ」（推量）など、いふも、いと、この世遠く、ゐ中びにたるや。（夢浮橋　五の四二五）

省略型　一八例

・まして、松のひびき、木ぶかく聞えて、氣色ある鳥の空聲に鳴きたるも、「梟は、これにヤ」と、おぼゆ。（夕顔　一の一五一）

・紀の守とか、ありし人の、世の物語すめりし中になむ、「見しあたりのことにヤ」と、ほのかに、思ひ出でらるる事ある心地せし。（夢浮橋　五の四三〇）

これらは、具体的な個物を対象として、その同定を行う単純な名詞文の疑問文である。「にや」は、「ナリ」による基本的には名詞述語文の疑問だから、単純なモノ名詞の名詞文の疑問表現として用いられる場合があるということである。

しかし、「にやあらむ」で注意すべきは、この述語は、ムによって構成されている点である。これは「にやあらむ」全体にいえることだが、「にやあらむ」のムに未来の意味は出てこない。むしろ、「一般性」という角度で用いられているのである。これは通常の「〜ヤ〜ム」とは状況が異なっている。この単純な名詞述語疑問文に即していえば、主語にあたる部分は個的具体的なモノであり、それが、一般としてどのようなタイプのモノに属するのかを問題としているのである。この個別具体的なものを一般性の世界から捉えなおすという姿勢は、省略タイプにおいて想定される結びが「あらむ」であれば同様のことが言える。

ここで述べた「あらむ」のムは一般性の世界を表しているということは、この単純な名詞文タイプのみならず他のタイプにもみな言えることであるし、このことが、「にや（あらむ）」の解釈適用型疑問の特徴でもある。（注三）

（二）の二b　事態主語事態述語タイプ

この場合は、主語にあたる部分は、コト名詞である場合も、連体形の場合もある。述語にあたる名詞は当然コト名詞である。

「にやあらむ」　三例

・その頃ほひきゝしことの、そばそば思ひ出らるゝは、ひが事にヤあらむ。（行幸　三の七〇）

・わが身にては、『まだ、いと、あれが程にはあらず、目も鼻も、なほし』とおぼゆるは、心のなしにヤあらん」（総角　四の四二七）

「省略」　一五例

・これも、故尼上の、この御事をおぼして、御おこなひにも、祈りきこえ給ひし佛の御しるしにヤ」と、思ゆるに（紅葉賀　一の二七七）

・いと若く、清らにて、かく、御賀などいふことは、「ひが數へにヤ」とおぼゆるさまの（若菜上　三の二四二）

このタイプは、文の中に、主題にあたる句が明示されていて「〜コトハ〜コトニヤ（アラム）」という文型になっているものである。主題にあたる部分は、直面した事実であり、「〜コトニヤ」にあたる部分は、その事実の背後にあると話者が推測した事情や話者が感じた評価など、事実への解釈を内容としていて、そのような背後事情や評価などが適用可能かどうかを問う疑問文となっているのである。省略型としてあげた「若菜上」の用例ならば、「御賀などいふ」コトに対して、「ひが數へ」であるという解釈を適用しその適否を問題としているのである。

（二）の二c　挿入解釈タイプ

「にやあらむ」　一五例

・「朝の露に異ならぬ世を、何をむさぼる、身の祈りにか」と、きゝ給ふに、御嶽精進にヤあらん、「南無當來導師」とぞ、拜むなる。（夕顔　一の一四一）

・宿世つたなき人にヤ侍らん、思ひ憚るべきこと侍りて、「いかでか、人には御覽ぜられむ」など、人知れず嘆き侍れば、心ぐるしう見たまへ煩ひぬる」といふ。（玉鬘　二の三三七）

「省略」　六〇例

・「釣する海士のうけなれや」と、起き臥し思しわづらふけにヤ、御心地も、うきたるやうに思されて、なや

ましう、し給ふ。（葵　一の三一七）

・年ごろ、念誦のついでにも、うちまぜおもひ給へわたるしるしにヤ、嬉しき折に侍るを、まだきに、おぼほれる涙にくれて、えこそ、聞えさせず侍りけれ」（橋姫　四の三一九）

形式として「〜コトハ〜コトニヤ（アラム）」という形にはなっていないが、後続部分に、事実や話者の観察を述べた部分があり、それに対して、その背後の事情や評価などを述べる形になっている。「夕顔」の用例であれば、「『南無當來導師』とぞ、拜む」という声を耳にして、それに対して「御嶽精進ではないのか」という解釈を適用することを問題としているのである。挿入的に用いられるためか、これまでの類型に比して、結びがはっきりした「にやあらむ」よりも、省略型が多く用いられている。（二）の二のbであげたタイプとは異なり、直面した事態を示す文が「にや（あらむ）」より後にきているが、これは、文脈上、あくまで、直面した事態が重要であり、挿入された解釈はそえものに過ぎないからであろう。

「にやあらむ」型にも省略型にも、「〜けにや」「〜しるしにや」「思ひなしにや」など決まった形が多く用いられる。「〜けにや」「〜しるしにや」などは、現代語の「タイヤを替えたためか、何だかくるまが滑らかに走る。」などのような文との類似性を感じさせる。

この挿入句タイプは、

・このきはに立てたる屏風も、端の方おし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにヤ、うち掛けて、いとよく見いれらる。（空蝉　一の一一一）

のような「〜バニヤ」タイプとの連続を感じさせる。挿入句タイプが、前後の文脈に依存しているのに対して、「〜バニヤ」タイプは、因果関係を示すものであることを接続助詞バによって明示している。これも現代語の「日差しが強いからか、サングラスをかけた人が多い」のようなタイプとの類似性が感じられる。

（二）の二d　状況解釈タイプ

「にやあらむ」　四例

・「おぼえずこそ侍れ。筑紫の國に、廿年ばかり經にける下衆の身を、見知らせ給ふべき京人よ。人たがへにヤ侍らむ」とて、より來たり。（玉鬘　二の三四六）

・あきたる障子を、今少し、おし開けて、屏風のつまより、覗き給ふに、宮とは、おもひもかけず、「例、こなたに來馴れたる人にヤあらん」と、思ひて（東屋　五の一六五）

「省略」　二二例

・「比良の山さへ」といひける、雪のあしたを思しやれば、「祭の心、受けたまふしるしにヤ」と、いよいよ、頼もしくなむ。（若菜下　三の三三三）

・ことなくて過ぐすべきころは、心のどかにあいな頼みして、いとしもあらぬ御心ざしなれど、「『今は』と、別れたてまつるべき門出にヤ」と思ふは、あはれに悲しく（若菜下　三の四一六）

このタイプでは、はっきりした形で眼前の事実が示されているわけではない。課題となる事態は文表現として明確化されないままで、それに対する一般性の世界からの捉えなおしの部分のみが「にや（あらむ）」で示されるのである。二cの挿入解釈は、通常の文脈への挿入であり、重点は、後続部にあるのだが、このタイプは、これ自体が主要な文脈をなしている。したがって、単なる現状解釈のみならず、危惧や期待といったニュアンスを帯びて用いられることが多い。

（二）の二e　その他

「にやあらむ」型にはあと一例あるが、これは解釈が揺ていて、どのタイプか迷ったので保留とした。また、省略型には一〇例ほど、

・「物思し亂るゝ慰めにもヤ」と、忍びていで給へるなりけり。（若紫　一の三二一）（岩波旧大系「せん」小学館旧全集「ならん」を補うとする）のような用例があるが、これらはニが本当に断定助動詞か迷うものなのでこれも保留とする。

（二）の三　連体形下接タイプ

名詞に下接するものも、その名詞がコト名詞である場合には、解釈適用型の疑問文となることが多かった。したがって、当然、ニヤの上が連体形である場合にも、同じ様に解釈適用型疑問文が多くなる。

（二）の三a　単なる主述構文タイプ

「にやあらむ」　五例

・「かかることを『くやし』などは、いふにヤあらむ。さりとて、いかがはせん。われ、さりとも、心ながう見はててむ」（末摘花　一の二五二）

・げに、かく、賑はしう、花やかなる事は、見るかひあれば、物語などに、まづ、言ひ立てたるにヤあらむ。されど、くはしうは、えぞ、數へ立てざりけるとや。（宿木　五の六五）

「省略」　九例

・忍やかにうちみじろき給へるけはひも、袖の香も、「昔よりは、ねびまさり給へるにヤ」とおぼさる。（蓬生　二の一五八）

・「折々ほのめく、箏の琴の音こそ、心得たるにヤ」（橋姫　四の三二九）

これらは、連体形接続であるから、コト述語になっているのだが、主語の方はモノであり、コトによってモノの属性性質を提示することの適否を問う疑問文となっている。したがって、（二）の二で述べたモノ名詞文と近いものになる。

（二）の三ｂ　事態主語事態述語タイプ

「にやあらむ」　一一例

・「怪しくも、さまかへたる高麗人かな」といふは、心知らぬにヤあらむ。（花宴　一の三一三）

・「げに、をかしきさましたりけり。心なむ、まだなつき難きは、見馴れぬ人を、知るにヤあらむ。ここなる猫ども、ことに劣らずかし」とのたまえば（若菜下　三の三二〇）

「省略」　一〇例

・我君、かう、おぼえなき世界に、かりにても、移ろひおはしましたるは、「もし、年頃、老法師の祈申し侍る神・佛の、あはれびおはしまして、しばしのほど、御心をも惱ましたてまつるにヤ」となむ思う給ふる。（明石二の七三）

・「『桂の院といふ所、にはかに造らせ給ふ』ときくは、そこにすゑ給へるにヤ」と、おぼすに、心づきなければ（松風　二の二〇〇）

このタイプは、名詞下接と同様である。用例数もほぼ拮抗している。

（二）の三ｃ　挿入疑問タイプ

「にやあらむ」　二六例

・思ふ心ありて、ゆきかゝづらふかたも侍りながら、世に心の染まぬにヤあらむ、獨り住みにてのみなむ。（若紫　一の一九〇）

・宮は「いと、いとほし」と思すなかにも、をとこ君の御かなしさは、すぐれ給ふにヤあらん、かゝる心のありけるも、うつくしうおぼさるゝに、なさけなくこよなき事のやうに、おぼしのたまへるを（少女　二の二九六）

「省略」　四五例

・物の情知らぬ山賤も、花の陰には、猶やすらはまほしきにヤ、この御光を見たてまつるあたりは、ほどほどにつけて（夕顔　一の一三三）

・箏の御琴ひき寄せて、かき合はせすさび給ひて、そゝのかし聞えたまへど、かの勝れたりけむも、ねたきにヤ、手も觸れ給はず。（澪標　二の一一二）

これも、名詞下接のものとほぼ同様で、主文脈よりも相対的に軽い表現になっている。名詞下接同様、省略型が多い。

（二）の三d　状況解釈タイプ

「にやあらむ」　九例

・「あな、かうばしや。いみじき香の香こそすれ。あま君のたき給ふにヤあらむ」（宿木　五の一二二）

・「『人の、かくし据ゑたるにヤあらむ』と、わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく、落し置き給へりしならひに」とぞ。（夢浮橋　五の四三五）

「省略」　五四例

・いとど夢の心地して、「もし、受領の子どもの、すきずきしきが、頭の君におぢ聞えて、やがて、ゐて下り

たるにヤ」とぞ、思ひよりける。（夕顔　一の一七三）

・をとこ君は、とく起き給ひて、女君は、更に起き給はぬ朝あり、人ひと、「いかなれば、かくおはしますらん。御心地の、例ならず思さるゝにヤ」と、見たてまつり嘆くに（葵　一の三五七）

（二）の三dと同様、直面した事態との関係がはっきりと文脈に示されないタイプである。挿入タイプと異なり、直面した事態の描写よりも後に登場する。ちなみに、「夢浮橋」は、薫が対話した浮舟の真意を解釈する内容であり、「夕顔」のものは、「いとど夢の心地する」ことへの解釈である。このようにこのタイプは、解釈が下される対象の事態がはっきりしなくなるにつれて、単なる推量とも感じられるようになる。

（二）の三e　「原因〜結果にや」タイプ

これは名詞下接には見られないタイプである。

「にやあらむ」　四例

・「思ふやうありて、もの給しへるにヤあらむ。さも、すすみ物し給はばこそは、過ぎにしかたの孝なかりし恨みも、解けめ」と、のたまふ御心おごり、こよなうねたげなり。（藤裏葉　三の一八六）

・「これも、あまたにうつろはぬほど、目とまるにヤあらん。花のさかりに、ならべて見ばや」など、の給ふに、御返あり。（若菜上　三の二五四）

「省略」　九例

・「我いもうとゞもの、よろしき聞えあるを思ひて、の給ふにヤ」とや心得らん、ものも言はず。（帚木　一の六二）

・「さらば、その子なりけり」と、おぼし合はせつ。「御子の御すぢにて、かの人にもかよひ聞えたるにヤ」

と、いとどあはれに見まほし。（若紫　一の一九〇）

あたかも、ラムの原因推量のように、直面した現実事態の方に「ニヤ（アラム）」が下接している。「藤裏葉」の用例では「ものし給へる」というのは、目にみえる結果であり、「思ふやうあり」というのは背後の事情である。また、「帚木」の用例においても「の給ふ」ことは直面した事態であり、「我いもうとゞもの、よろしき聞えあるを思ひて」というのは推測される背後の事情である。これは、以下のような事情によるものと考えられる。この連体形下接タイプは連体形によって文的な内容全体が句的体言にまとめられているがその句的体言の内部に背後の事情と直面する現実事態の両方が含みこまれているのである。先の「帚木」の用例ならば「我いもうとゞもの、よろしき聞えあるを思ひて」という原因と「の給ふ」という結果の二つともが一つの句的体言に収まっているのである。そしてその原因と結果の両者は通常の因果関係の配列順にしたがって、背後の事情が先行し、現実事態が後になる。つまり、ニヤのすぐ上は、現実事態になるのである。このようにこのタイプでは、ニヤが適用されるべき解釈を示す部分のみならず、直面した現実事態までも含みこんだ部分に下接しているのである。

とはいえ、このタイプは現代語の「雨が降ったから地面が濡れたのか」のようなタイプほどは多用されてはいない。

（二）の三ｆ　その他　べきにや（あらむ）

「にやあらむ」　一例

・「人におとされ給へる御有様とて、めでたき方に、改め給ふべきにヤは侍らん。（若菜下　三の三七〇）

「省略」　八例

・「かうやうのためしを聞くにつけても、亡からむ後、うしろめたう思ひ聞ゆる」さまを、の給へば、御顔、

うち赤めて、「心憂く、さまで、おくらかし給ふべきにヤ」とおぼしたり。（夕霧　四の一四二）

・日頃、おとづれ給はざりつれば、「おぼつかなくて過ぎ侍るべきにヤ」と、口惜しくこそ侍りつれ」と、息の下にのたまふ。（総角　四の四五五）

「〜べきにや（あらむ）」についても、現実を対象に、「〜べし」で妥当性や当為性を持つとして提示された事態を適用すべきかどうかを問題としているのだから、解釈適用型と考えられるのだが、反語や将来に対する危惧反発といった異なるニュアンスを帯びて用いられることが多い。ここでは危惧や反語の色合いの強いものをここに分類した。

（三）まとめ

以上見て来たように、ニヤ疑問文は、解釈適用型であった。文末カによるものは少数であったのだが、ニヤは多数用いられており、こちらがやはり優勢であったのだろう。

一方、事態成立型疑問文は、ニヤ以外のヤの疑問文の大半がそうなのであるが、しかし、すべてが事態成立型疑問文というわけではない。たとえば、

・うめきたる氣色も、はづかしげなれば、いと、なべてはあらねど、我も、思しあはすることヤあらん、うちほゝゑみて（帚木　一の五八）

・あいなき心の、さまざま亂るゝヤ、しるからむ、「色かはる」とありしも、らうたう思えて、常よりことに、語らひ聞え給ふ。（賢木　一の三九四）

のように普通の「〜ヤ〜ム」でも、挿入されて、後続部分への解釈をなす解釈適用型の疑問文として用いられることもある。

用例数、意味解釈ともに、大まかな調査ではあるが、「〜ヤ〜ム」形式では、用例数二三八例のうち、解釈適用型が四六例、事態成立型が一八六例、どちらとも解釈できるものが六例あった。一方、「〜ヤ〜ラム」形式では、用例数九二例中、解釈適用型が五〇例、事態成立型が四二例でほぼ拮抗している。また「〜ヤ〜ケム」では、用例数六四例で、解釈適用型が五五例、事態成立型が九例と逆転している。

結びがム系以外の助動詞や裸の用言の場合には、用例数一二六例のうち、解釈適用型が二五例、事態成立型が一〇一例であった。

文末用法では、ほとんどの用例が事態成立型であった。ニヤ以外の結び省略の形式については未調査である。

ここから言えることは、係助詞ヤは、ニヤ以外は、ラムやケムのように述語自体に「原因推量」の用法があるものを別にしては、通常は、事態成立型の疑問文に用いられるようだということである。

やはり、事態を句的体言の形にまとめたものを疑問文に用いる「ニヤ（アラム）」は、（はじめ）に述べたように、解釈適用型の疑問文に特化しているといってよいだろう。

注

注一　現代語「〜のか」はすべて、解釈適用型疑問文であると主張するつもりはない。

注二　ヤが問いにカが疑いに用いられるという傾向のすべてをここから説明しようというわけではもちろんない。

注三　結びが「にやある、にやありける」など「あらむ」でないものは、反語に傾きやすい傾向がある。

参考文献

磯部佳宏「『源氏物語』の要判定疑問表現「ーニヤ。」形式を中心に」日本文学研究（梅光女学院大学）二八号　一

九九二年一一月
吉田茂晃「疑問文の諸類型とその実現形式　ーノデスカ／マスカ型疑問文の用法をめぐってー」島大国文　二二号
一九九四年
近藤要司「『源氏物語』の助詞ヤについて」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集　日本語の研究』明治書院　一九九五年一一月
近藤要司「『源氏物語』の助詞カの文末用法について」金蘭短期大学研究誌　第二九号　一九九八年一二月